

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	顧 宇豪
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation)			
陽成院関係歌合の研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	准教授	小川 陽子	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	久保田 啓一	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	佐々木 勇	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、陽成院（貞観十年（八六九）～天曆三年（九四九）、在位貞観十八年（八七六）～元慶八年（八八四））の名を冠する四つの歌合（「陽成院歌合（夏虫恋）」・「陽成院歌合（惜秋意）」・「陽成院親王二人歌合」・「陽成院一宮姫君歌合」）を研究対象とし、陽成院関係歌合の特徴と和歌史における位置について考察を行ったものである。第一部を「陽成院歌合（夏虫恋）」、第二部を「陽成院歌合（夏虫恋）」、第三部を「陽成院親王二人歌合」、第四部を「陽成院一宮姫君歌合」の研究に当て、各部においてはまず各歌合の本文について検討した。各歌合の本文を記載した文献資料を蒐集し、翻刻・校異を行い、校訂本文を作成した上で、各歌合の成立事情について考察した。成立事情は十卷本冒頭仮名記に拠らざるを得ないが、先行研究では冒頭仮名記の解釈に誤りが見られる。冒頭仮名記を再検討することを通して、各歌合の成立事情を再確認した。続いて、各歌合の歌の表現について調査し、一部の歌の解釈について重点的に考察した。最後に、四つの歌合を比較し、陽成院関係歌合の発展過程とそれぞれの特色を明らかにした。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第一部では、「陽成院歌合（夏虫恋）」について考察した。第一章では、「夏虫恋」の本文について、十卷本系統の尊経閣蔵本の部分と宮内庁書陵部本、廿卷本系統の柏木・二条切を翻刻し、異同を確認した上で、校訂本文を作成した。</p> <p>第二章では、まず「夏虫恋」の成立時期を再検討した。『伊勢集』諸本の検討により延喜十二年夏成立説が成り立たないことを述べた上で、同時代の「夏虫」詠との比較考察を行った。さらに、同時代の歌合の歌題を整理・検討することにより、「夏虫恋」という歌題、及び「惜秋意」と「親王歌合」の「寝覚めの恋」・「暁の別れの恋」といった陽成院関係歌合の歌題の特殊性を指摘した。</p> <p>第三章では、まず「夏虫恋」における表現について考察した。「夏虫恋」における恋歌表現は基本的に『古今和歌集』五四四番歌に基づくもので、蛾の行動を指す「投火」と人の恋に対する情熱を表す「捨て身」という二つになっていることを確認し、「夏虫恋」の歌のパターンを七つに分類した。また、『伊勢集』における「夏虫」を詠む歌を詳しく検討し、内容的にも「夏虫恋」の歌と異なっていることを明らかにした。</p> <p>第二部では、「陽成院歌合（惜秋意）」について考察した。第四章では、「惜秋意」の本文について、独自系統の肥前島原松平文庫本を翻刻し、異同を確認した上で、校訂本文を作成した。</p> <p>第五章では、「惜秋意」における『古今和歌集』周辺先行歌の撰取について詳しく分析した。『古今和歌集』周辺の先行歌撰取が「惜秋意」の基盤となっていることを明らかにし、そこから習作的な</p>			

性質が窺えることを論じた。また、先行研究で指摘された漢詩文撰取について検討し、直接的な撰取関係は認められないことを述べた。

第六章では、「惜秋意」における恋歌的表現について考察した。季節の過ぎ去ることを惜む歌に恋歌的表現を加えるという発想は当時ではまだ普及していないことを明らかにした上で、「惜秋意」の具体的な工夫について論じた。

第七章では「惜秋意」の二番歌、第八章では「惜秋意」の一三番歌という二つの難解歌の解釈について詳しく検討した。この二首の歌は特定の表現によって歌の意味が多方向になってしまい、歌の味わいが深まると同時に晦渋になっている。そこから「惜秋意」は表現を大胆に用いて実験的に歌を詠む場であったことを論じた。

第三部では「陽成院親王二人歌合」について考察した。第九章では「親王歌合」の本文について、十卷本系統の尊経閣蔵本、廿卷本系統の陽明文庫本と古筆の唐草本を翻刻した。そして、十卷本系統と廿卷本系統の本文異同を詳しく分析した。結果として両系統の本文は優劣を判断できず、従来十卷本が重んじられていたが、廿卷本も参考価値が十分あることを示した。

第十章では、「親王歌合」の成立事情について、元良・元平親王二人のみによる開催という従来の論説を再検討し、陽成院が両親王を左右の頭に命じた形で開催した可能性が高いことを論じた。

第十一章では、まず「親王歌合」における先行歌撰取について考察した。「夏虫恋」・「惜秋意」を受け継ぎ、「親王歌合」においても『古今和歌集』周辺先行歌の撰取が見られるが、その撰取の技術が一層進歩したことを明らかにした。さらに、その他の陽成院関係歌合の歌の表現との共通点を指摘した。第四部では、「陽成院一宮姫君歌合」について考察した。第十二章では、「姫君歌合」の本文について、十卷本系統の書陵部本・陽明文庫本と廿卷本系統の陽明文庫本を翻刻し、異同を確認した上で、本文を作成した。

第十三章では、「姫君歌合」の返歌合としての意義について検討した。まず、返歌合の先駆けに当たる「京極御息所歌合」との比較検討を行い、本歌と返歌の関係性を明らかにした上で、「姫君歌合」は姫君に和歌の教育を施す目的を込めていた習作的なものであることを論じた。そして、歌合内部において表現の連動が見られ、その開催状況は即座的・漫然的であることも指摘した。

第十四章では「姫君歌合」における陽成院関係歌合からの継承を考察した。成立事情においては基本スタンスを、歌の表現においては特徴的な表現を、それぞれ先行する陽成院関係歌合から受け継いでいることを明らかにした。そして、歌の修辞技法において、「姫君歌合」は他の陽成院関係歌合と共通して巧妙な掛詞を使用していることを指摘した。

終章では、各章の概要、研究の成果、本研究の今後の課題等を詳述した。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 陽成院関係歌合4種について、従来の研究では見落とされていた伝本をも含めて現存諸本を翻刻・校合し、校訂本文を作成することにより、各歌合研究の基盤形成に寄与している点。
2. 陽成院関係歌合の本文読解ならびに周辺資料との比較検討により、各歌合の成立状況を明らかにした点。
3. 同時代和歌から用例を博捜し、陽成院関係歌合の歌題および表現の特色を明らかにすることにより、和歌史への定位を行った点。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 6年 2月 5日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)